加納六郎先生を偲んで*

Rokuro KANO (1920–2000)

日本衛生動物学会名誉会員加納六郎先生は、去る5月8日ご自宅で脳梗塞のため倒れられ、以後4カ月の闘病生活を続けておられましたが、平成12年9月17日、午前11時42分心不全のため東京医科歯科大学附属病院で逝去されました。先生は昭和20年3月千葉医科大学医学部を卒業され、直ちに陸軍軍医学校に入学されましたが、同年9月には陸軍軍医中尉予備役で終戦を迎えられました。その後、東京慈恵会医科大学を経て昭和23年に東京大学伝染病研究所に入所、26年には医学博士の学位を授与されています。翌27年には、東京医科歯科大学講師として赴任、29年助教授、32年に教授に昇進され、昭和60年から平成3年まで同大学の学長を勤められました。

日本衛生動物学会では、永年に亘る評議員、幹事のほか、昭和47–48, 55–56, 59–60年の3期に亘り会長を務めておられます。先生がハエ類の研究を始められたのは東京大学伝染病研究所時代に佐々学先生に勧められたのがきっかけと聞いています。以後、倒れられた前日まで国立科学博物館分館で顕微鏡を覗いておられました。先生は、日本産ハエ類分類の草分けとして、それまで国内ではあまり研究されていなかったニクバエ科、クロバエ科の分類に手をつけられ「Fauna Japonica, Sarcophagidae」と「Fauna Japonica, Calliphoridae」の2冊の大著を著しておられます。これら2冊はこのグループの分類の基礎として貴重なものとなっています。先生の興味は、昆虫類のみではありませんでした。特に有毒動物については、ご自分で研究された訳ではありませんが、専門の研究者にあれこれとサジェッションされ、毒の解明を楽しみにしていた様子でした。特に、昭和37–8年頃、当時東京医科歯科大学におられた田宮信夫先生にウミヘビ毒の研究を勧められ、当時とても不便であった奄美大島へ採毒に通い、ついにエラブウミヘビの毒物質エラプトキシンの構造が解明されたのは有名な話です。この他にも、ヤマカガシの頸腺毒の研究などにも一役かっています。教室主任としての先生は、とても面倒みのいい方でした。とにかく、なにか頼まれても絶対に嫌とはおっしゃらず、快く引き受けてしまわれました。誰とでも仲良くというのが先生

* Dr. Rokuro KANO. By Satoshi SHINONAGA.

のモットーでした。魚料理が得意で、市場に買い出しに行っては教室員にふるまってくれたものです。正月には、築地の魚市場から大量の魚を仕入れて、新旧全ての教室員と埼玉医科大学や科学博物館のスタッフを招待してパーティーを開いてくれたのも、懐かしい思い出になってしまいました。昭和43年のアフリカでの文明国では見られない手遅れの虫垂炎、昭和51年のイラクのバグダッド空港での爆弾破裂事件、平成10年の心臓手術と何度も危ない状態から生還された先生でしたが、残念ながら今回は帰らぬ人となってしまいました。執筆途中の原稿、印刷中の雑誌など未完成のものを沢山残されさぞかし残念だったと思います。いろいろと多くの指導をうけた一人として謹んで追悼申し上げます。

(篠 永 哲)